

性とスーツ

アン・ホランダー著

評者・若桑 みどり

著者は、著名な「衣服の美術史家」である。旧来、衣服の歴史は服飾史としてアカデミックな学問の周縁に置かれていた。だが著者は、衣服を、社会や時代を「反映」する「習俗」ではなく、人間の美意識と性を「表現」する「芸術」だと定義する。著者によれば、美と性は不可分の関係にある。したがって、本書の内容は、一口に言えば、表題どおり衣服に表現されたセクシュアリティの歴史である。

西欧では中世まで男女はほとんど同じ袋状の衣服を着ていた。十二世紀に男性が鎧よろいを発明した。鎧はその機能上、男性の体型にそっくり合わせ、運動を容易にする合理的な形態をもっている。しかもそれは男性の五体の明確な美しさと金属のもつ幾何学的抽象性を合わせ持つがゆえにこの上なくセクシー

衣服に示される
性差の歴史

だった。これが今日のスーツの原型である。スーツは男性の裸体をなぞったもので、それ故にダイレクトに性的であるが、意識的に簡素化された動的な抽象形態というみごとな「モダン・ルック」である。ことによって、性的であると同時に、肉体の自己管理という男性の市民的美德を象徴するものとなった。

これに反して女性服のほうは二十世紀まで近代化されなかった。上半身がむきだし、下半身は厚いスカートのくるむという上下分裂症が続いた。これは「人魚」神話であると言者は言う。上半身は快楽と母性を約束し、下半身は隠された不浄の怪物的肉体を隠蔽している。だから、二十世紀後半になってよう

やく女性がズボンはを着き、スーツのもつモダンティに追いついたことは、女もまた両足をもっていること、つまり男性とちがわない内臓や身体、ひいては脳をもった「人類」だということを証明したことにほかならない。

いまや女性服は、男性の衣裳いしやう体系を奪い、自分たちに合うように修正し、それを男性に返している(女性が修正した男性服を男性が着用する)。この互換作用によって、やがて性差の境界は越えられる

であろうと予言する。大胆だが示唆に富む画期的な試論である。中

野香織訳。(白水社、二八〇〇円)

◇アン・ホランダー―ニューヨーク

ク人文科学研究所特別研究員。

